
性格の模倣と快苦の習慣づけ

—アリストテレスのエートス論とミーメーシス論を結んで

加藤喜市 (東京大学)

アリストテレスは『政治学』第8巻の「音楽(ムーシケー)」教育の文脈で、音楽を通じた快苦の習慣づけについて語っている。

「[音楽による] 模倣 (*mimēseōn*) を聴くと誰でも、リズムや旋律それだけの場合でも、共感が (*synpatheis*) 生じてくる。また、音楽が快いものに属して、徳が正しく喜ぶことや好む・嫌うことに関わるからには、あきらかに、良い性格 (*ēthēsī*) や立派な行為を正しく判定すること・喜ぶことほど、[音楽によって] 学ぶ (*manthanein*) ・習慣づけられる (*synethizesthai*) べきものは何もない」。
(1340a12-8)

一種の情操教育と言うべきであろうこの習慣づけの理論的背景には、「性格(エートス)」を「模倣(ミーメーシス)」するものとしての「音楽」という考え方があると思われる。すなわち、音楽の「リズムや旋律」は、「怒り」・「穏和」・「勇気」・「節度」といったさまざまな「性格」との類似性を有しているとされるが(1340a18-20)、ここには「実物」と「模倣物」の関係が認められる。たとえば、勇敢な旋律を聴くと勇ましい気持ちになるというように、或る「性格」(=実物)を「模倣」した「音楽」(=模倣物)を聴くことによって、対応する感情が引き起こされるのである。こうした実物・模倣物に対する快苦のメカニズムを理解するためには、さらに、『詩学』における模倣論にも目を転じる必要があるだろう。

そこで本発表では、まず第一節で、『政治学』第8巻第5章の音楽教育論における快苦の習慣づけについてのテキストを見てから、第二節で、『詩学』第4章で論じられている模倣と快苦の関係を確認する。第三節で、主に Halliwell の論考を手がかりにして、模倣物のもたらす快苦について、〈学びの快楽〉と〈快苦の融合〉の論点を検討したあと、最後に、以上の音楽による快苦の習慣づけと「性格の徳」の形成との関係をあきらかにしたい。

『ニコマコス倫理学』の最終巻最終章(第10巻第9章)でアリストテレスは、倫理学の聴講者が習慣によって前もって、善き仕方で快苦を感じることができるようになっていくべきだという、若者の予備教育について言及している。「習慣によって (*tois ethesin*) 聞き手の魂が、立派な仕方で喜び・嫌うほうへとあらかじめ備えられていなければならない」(1179b23-6)というこの快苦の習慣づけに関する記述は、あきらかに、先の『政治学』の議論と重なり合うものだろう。アリストテレスの性格形成論における音楽教育の射程を見極めることが、本発表の最終的に目指すところとなる。